

会計史という世界を歩く

三光寺 由実子



本誌に初めて登場するなり、唐突な疑問である。そう、これが、今回から始まる大きなテーマだと思っていた。ありがたい。

読者の皆さんは、「会計史」という学問領域をご存知だろうか。大学院時代を勘定に入れば、学者の世界に入ってもう20年近くの年月が経つが、学生の頃はしばしば、公認会計「士」を目指しているのかと聞き返されたものである。自分の行っている研究の認知

なぜ「会計史」を研究するのか

度の低さに愕然としたこともしばしばであった。

さて、「会計史」に話を戻そう。そもそも、「会計史」とは何か。中野・清水編著「2019」『近代会計史入門（第2版）』の冒頭では、「会計史（accounting history）」という研究分野は、言うまでもなく、会計研究と歴史研究との境界に位置する学際科学（interdisciplinary science）である」という。会計学でもあり、歴史学でもあるというその特性は、わかるようでわかりにくい。

そこで、私が論文を書いたり、学発表をしたりする場合、必ず意識をするのが、「会計学上で、だれもが知っている論点について、必ず考える」ということ。特に、私の場合は、今日広く一般に使用されている簿記である「複式簿記」が一つのキーワードになっている。それに加え、「歴史学でもある以上、現代の思考に引け張られないこと」である。

では、なぜ、「会計史」を研究するのか。これが、経済学や法学であれば、教科書の冒頭に「なぜ経済学を学ぶのか」を逐一説明せず、自明のものとして解されている場合も多々あるのである。他方、会計史という学問は、しばしば、この「なぜ」に答えな

ければならない宿命を負っている。多くの人が抱く、この疑問と、これに研究する者が丁寧に答える一連の動作が繰り返されるのは、会計史というものがなんとなく得体の知れない学問と捉えられているからかもしれない。

先の書籍、中野・清水編著「2019」では、「会計史は、『会計』という人間の営む行為そのもののアイデンティティを時間軸に沿って再確認することであり、そのことにより、未来への展望を承けて過去を再解釈することを可能とするだけでなく、現在（と未来）の問題を考察するための視点を提供するものと考えられる」と答えている。過去に目を向ける中で、現在・未来を見据えるという壮大な研究であることを端的に表しているだろう。

それに留まらず、エキサイティングな学問領域であることが私にとっては研究の一番の原動力である。何百年も前の古い文書の中の肉筆から、先人たちの思考を読み解くのである。さて、次回からはこの「会計史」という名の、知的好奇心を掻き立てるエンターテインメントの世界にご案内差し上げたい。

〈和歌山大学経済学部 准教授 博士（経営学）〉

わだ
浪
サ
ロン

第126回

SDGs

(持続可能な開発目標)

に向けて私たちが出来ること

■ 話題提供者 岡崎 裕 (和歌山大学大学院教育学研究科教授)

■ 日 時 5月19日 水 19:00 ~ 20:30

■ オンライン講演会 / 参加無料 / 申込必要 / 100名限定

■ 申込は左記QRコードからご登録ください。*申込は18日|火|17時まで

■ 問合せ先 和歌山大学岸和田サテライト TEL・FAX 072-433-0875



申込はこちらから